

『マハーバーラタ』第十七巻・第十八巻

中 村 了 昭

はしがき

1. 本稿はインドの国民的大叙事詩『マハーバーラタ』の終結を飾る第十七巻、第十八巻の和訳である。
2. 内容は、現世の業務を終えたパーンドゥ五王子と王妃ドラウパディーが、「生命を放棄する法」の実行を決意して、聖なる旅に出て、天国に到達するのを題材とする。
3. テキストはキンジャワデカル校訂本を使用した。

第十七巻 偉大なる旅立ちの巻

第一章

吉祥なるガネーシャに帰依する。

ナーラーヤナ、人中の最上者ナラ、ならびに女神サラスヴァティーに拝礼して、「勝利（ジャヤ）」の祈りを述べてあれ。

ジャナメージャヤは尋ねた。

「ヴリシュニ族とアンダカ族の勇士の棍棒による闘争（と彼らの絶滅）を聞き、クリシュナが天界に昇った時に、パーンドゥたちは何をしたのですか。」(1)

ヴァイシャンパーヤナは語った。ヴリシュニ族の大殺戮を聞いてから、クル王は宮殿を出て、天国へ旅立つことを決意して、アルジュナに言葉をかけた。(2)

「大知の者よ、死神（カーラ 時）はすべての生類を焼く。死神の繩索はわれわれにも及んでいる、と私は考える。そなたもそれを理解してくれ。」(3)

このように兄に言われると、クンティー夫人の息子は、

「(天国へ旅立つ) 時が来ました。その時が来ました。」

と言葉を繰り返した。そして、大知の長兄の見解に、十分に賛意を表した。(4)

アルジュナの決意を知ると、アルジュナと双生児（ナクラとサハデーヴァ）は、アルジュナが述べた言葉に同意した。(5)

ユディシュティラは法を愛するために天国への旅立ちを決意すると、ユトスを連れて来さ

せた。そして(伯父ドリタラーシュトラ王が)ヴァイシャの妻との間に設けた息子(ユユトス)に王国を譲った。(6)

また、パルクシトをハステイナ都城の王位につけて、パーンダヴァの長兄は悲しみに満ちて、スバドラー(アルジュナの妻)に言った。(7)

「そなたの息子のこの息子は、クル族の王となるであろう。ヤドゥ族の生き残った者、ヴァジュラはすでに王位についた。(8)

パルクシトはハステイナ・ブラ都城を統治することになろうし、一方ヤドゥ族の王子ヴァジュラはシャクラ・プラスタを統治することになろう。彼をそなたが保護せよ。そなたは心を非法に向けてはならぬ。」(9)

この言葉を述べると、法王ユディシュティラは弟たちと一緒にすぐ、賢明なヴァースデーヴァに、また母方の伯父とラーマやその他の者に、(10)

水供養を捧げた。それから、彼は倦むことなく、すべての亡くなった親族のために、祖霊祭を規則正しく執り行った。(11)

勤勉な王は、ハリ神に敬意を表して、繰り返しその名を唱えつつ、鳥生まれのヴィヤーサ、ナーラダ、苦行を財宝とするマールカンデーヤ、パーラドヴァジャ族のヤージュニャヴァルクヤに、(12)

美味な食べ物を与えた。クリシュナ神に敬意を表してから、多くの宝石、衣類、村落、馬と車、(13)

数百、数千の女奴隷を、バラモンの最上者たちに与えた。都民はクリパに恭しく敬礼し、教師とした。(14)

バラタ族の最上者はパルクシトを弟子として彼に預けた。それから、ユディシュティラは再びすべての国民を呼び集めた。(15)

王仙は彼らに自分がしようと望んでいることを告げた。都や地方の住民は、王の言葉を聞くと、(16)

非常に不安になり、それに賛成しなかった。

「そのようにしないで下さい。」と彼らは王に言った。(17)

時の回転の法に精通する王は、彼らの考えに同意しなかった。法を重んじる王は、都民や地方の住民を説得した。(18)

彼の兄弟は旅立ちを決意した。ダルマ神の息子であるクル族の王ユディシュティラは、(19) 体から衣装を脱ぎ捨てて、樹皮をまとった。ビーマとアルジュナと双生児(ナクラとサハデーヴァ)、そして令名高いドラウパディーも、(20)

同様に、樹皮をまとった。王よ、バラタ族の雄牛よ、彼らは幸運を願う供犠祭を規定通りに行つてから、(21)

すべての祭火を水中に投じて、人中の雄牛たちは出発した。人中の最上者たちを見て、すべて

の婦人が声をあげて泣いた。(22)

以前に、彼らが賭博に敗れて、ドラウパディーを六番目にして都を出発した時のようであった。

今回は、兄弟は皆、旅立ちに快活であった。(23)

ヴリシュニ族の潰滅を見て、また、ユディシュティラの決意を知って、五人の兄弟、第六番目のドラウパディー、第七番目の犬、(24)

彼らは、王が自ら七人から成る一行の先頭に立ち、象（ハステイナ）の名前の都から出発した。都民や王の後妃たちは、かなり遠くまでついて行った。(25)

「引き返して下さい。」

と、王を説得できる者は、誰もいなかった。それから、都に住む人々は皆引き返した。(26)

クリパなどは、ユウトスを囲んでいた。蛇王の娘ウルーピーはガンジス川に入った。(27)

王女チトラーンガダーはマニプーラ都へ行った。パルクシトの母で、残った者たちは、パルクシトを囲んでいた。(28)

クル族の方よ、しばらくして、高貴なパーンダヴァたち、そして令名高いドラウパディーは（出発準備の）断食を行ってから、東方に向かって出発した。(29)

ヨーガを守って、「生命の放棄の法」を遵守しようと決意したこれらの高貴な者たちは、さまざまな国を通過し、さまざまな川や海を渡って進んだ。(30)

ユディシュティラが先頭に進んだ。ビーマは彼の後に続いた。次にアルジュナ、彼の後に双生児（ナクラとサハデーヴァ）、このような順序で進んだ。(31)

バラタ族の最上者よ、彼らの後にドラウパディー、女性の最上者で美しい腰、黒ずんだ肌、蓮華のような眼の彼女が進んだ。(32)

進み行くパーンダヴァたちに、一匹の犬がついて進んだ。進んで行くうちに、これらの勇士は赤色の海についた。(33)

大王よ、ダナンジャヤは宝玉を得たくなかったが、神聖な弓ガンディーヴァと尽きることのない二つの矢筒の矢を放たなかった。(34) その時、パーンダヴァたちは火の神が彼らの前に丘のように立っているのを見た。彼らの道をふさいで、神は人間の姿をとって立っていた。(35)

その時、七つの光輝を持つ神はパーンダヴァたちに話しかけた。

「おお、パーンドウの勇敢な息子たちよ。私を火の神と心得よ。(36)

大きな腕のユディシュティラよ、敵を悩ます勇士ビーマセーナよ、アルジュナよ、アシュヴィン双神の勇敢な二人の息子よ、私の言葉を聞け。(37)

クル族の最上者よ、私は火の神だ。カーンダヴァの森は私によって、またアルジュナとナーラーヤナの威神力によって焼かれた。(38)

そなたの弟パールグナ（アルジュナ）は最高の武器ガンディーヴァを放置して、森に行け。それはまったく必要でなくなった。(39) 高貴なクリシュナのもとに常にあった尊い円盤は姿を消した。必要な時が訪れる時、彼の手にも再び来るであろう。(40)

最上の弓ガンディーヴァは、以前にパールタのために、私がヴァルナ神から奪ったものだ。それをヴァルナ神にかえすがよい。」(41)

その時、兄弟たちは皆、そうするように促した。その時、彼は弓と尽きることのない素晴らしい矢筒を水中に投げ入れた。(42)

バラタ族の最上者よ、この後、火の神は姿を消した。パンドウの勇士たちは南方に向かって進んだ。(43)

それから、塩海の北岸で、バラタ族の虎よ、彼らは南西の方向に進んだ。(44)

それから、さらに彼らは西に転じて、海に水浸しになったドヴァーラカーの都を見た。(45)

最上者たちはさらに北方に転じて進んだ。彼らはヨーガの法を守りながら、全大地をまわろうと望んだ。

第二章

ヴァイシャンパーヤナは語った。

自己を抑制し、ヨーガに専念する彼らは、北の方位に来て、偉大な山ヒマヴァットを見た。(1) ヒマヴァットを越えて、彼らは海のように広い砂地を見た。それから、高い峰を持つ山のなかの最上の大きな山を見た。(2)

すべての者はヨーガの法を守って急いで進んでいたが、そのなかでヤージュニャセーニー（ドラウパディー）はヨーガの行が混乱したので大地に倒れた。(3)

彼女が倒れたのを見て、大力のビーマセーナは法を愛する王ユディシュティラに言った。(4)

「敵を悩ます勇士よ、この王女は邪悪な行為を決してしなかった。クリシュナー（ドラウパディー）が大地に倒れたのは、いかなる原因によるのですか。教えて頂きたい。」(5)

ユディシュティラは言った。

「人中の最上者よ、(われわれは皆彼女に対して平等に振る舞ったが) 彼女はダナンジャヤ（アルジュナ）に特に愛情を持った。その行為の果報を、彼女は今、受けたのだ。」(6)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

このように言って、バラタ族の最上者は彼女を顧慮することなく、法を重んじる、賢明な人中の雄牛は、心を統一して進んだ。(7)

それから、学識あるサハデーヴァが大地に倒れた。彼も倒れたのを見て、ビーマは王に言った。(8)

「この者はすべてのことに謙虚な態度で、われわれに仕えてくれましたが、このマードラヴァティーの息子が大地に倒れたのはどうしてですか。」(9)

ユディシュティラは答えた。

「この者は、いかなる者も知恵の点で自分に等しい者はいない、と考えた。その誤りのために、この王子は倒れたのだ。」(10)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

王はこのように言って、サハデーヴァをそこに残して進んだ。クンティーの息子ユディシュティラと犬は兄弟たちと共に進んだ。(11)

ドラウパディーとパンドウの息子サハデーヴァが倒れたのを見て、親族を愛する勇士ナクラが倒れた。(12)

容姿端麗で勇敢なナクラが倒れたので、その時、ビーマは再び王に尋ねた。(13)

「この兄弟は法を重んじて傷つけることなく、いつもわれわれの要望を実行し、端麗な容姿はこの世に比類なきものであったが、ナクラは大地に倒れました。」(14)

このようにビーマセーナに言われると、ユディシュティラはナクラについて言った。

「彼は法を重んじ、すべての知恵ある者のなかの最上者であった。(15)

だが、容姿端麗な点で、自分に等しい者はいない、というのが彼の見解であった。自分一人だけが優れている、ということが彼の心に根づいていた。(16)

このためナクラは倒れたのだ。ヴリコーダラよ、そなたはこのことを学ぶがよい。勇士よ、その人に定められたことを、その人は必ず受けねばならぬのだ。」(17)

彼らが倒れたのを見て、パンドウの息子、白馬を持つアルジュナ、敵の勇士の殺戮者は苦悩に打ちのめされて倒れた。(18)

シャクラ神(インドラ神)の威力を持つ人中の虎が倒れ、無敵の勇士が死に瀕している時、ビーマは王に言った。(19)

「この者が嘘偽りを口にしたのを記憶していません。高貴な彼は、冗談においてさえも、嘘偽りを口にしませんでした。いかなる悪行のために、彼は大地に倒れたのですか。」(20)

ユディシュティラは言った。

「アルジュナは、一日のうちに、敵を絶滅せねばならぬ、と言った。英雄的行為を自慢していたが、それは実現しなかった。このために倒れたのだ。(21)

パールグナ(アルジュナ)はすべての弓手を軽んじた。繁栄を望む者は決してそのようであってはならぬのだ。」(22)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

このように言って、王は進んだ。すると、ビーマが倒れた。倒れると、ビーマは法を重んじる王ユディシュティラに言った。(23)

「ああ、王よ、見て下さい。あなたの親愛なる私は倒れました。いかなる理由で、私は倒れたのですか。ご存じならば、教えて下さい。」(24)

ユディシュティラは言った。

「そなたは他の者(が不足すること)に気を配ることなくして、多くを食べ、そしてそなたの活力を自慢した。ビーマよ、そのためにそなたは地上に倒れたのだ。」(25)

このように言って、大きな腕のユディシュティラは、彼に注意することなくして、進んだ。

彼には、私がたびたび話した一匹の犬だけがついて進んだ。(26)

第三章

ヴァイシャンパーヤナは語った。

その時、天空と大地のすべてに響音をひびかせながら、シャクラ神が車に乗って、プリターの息子の所に来た。そして、

「乗れ」

と、彼に声をかけた。(1)

法を重んじるユディシュティラ王は、自分の兄弟が倒れたのを見て、悲しみにくれて、千眼の神に言った。(2)

「私の兄弟はここに倒れました。彼らは私と一緒に行ってほしいのです。彼らがいなくては、天国に行きたくありません。神々の王よ。(3)

プランダラ神よ、非常に優美で、幸福であることがふさわしい王女（ドラウパディー）は、われわれと一緒に行ってほしいのです。このことをお許し下さい。(4)」

シャクラ神は言った。

「そなたは天国で兄弟に会うことになろう。彼らはそなたよりも前に、ドラウパディーも一緒に皆、天国に行った。悲しむな、バラタ族の雄牛よ。(5)

人間の体を捨てて、彼らはそこに赴いた。バラタ族の雄牛よ、そなたはこの体を具えたままで、天国に行く。それに疑いはない。」(6)

ユディシュティラは言った。

「過去、未来の主よ、この犬はいつも私に奉仕しました。このものを私と一緒に行かせて下さい。私の心はこのものへの慈愛で満ちています。」(7)

シャクラ神は言った。

「王よ、不滅であること、私に等しい力、完全なる繁栄、偉大なる完成、そしてあらゆる天国の幸福、これらをそなたは今日獲得した。この犬を放棄せよ。このことにいささかの残酷なことはないのだ。」(8)

ユディシュティラは言った。

「千眼の神よ、信義を重んじる方よ、信義を重んじる者には、信義をはずれたことをするのは、甚だなし難いことです。私は幸福を得るために、私に奉仕してくれた者を放棄しなければならぬような幸福を、得たくはありません。」(9)

インドラ神は言った。

「天国には、犬を連れた者のための住所はないのだ。クローグヴァシャという悪霊どもが、(犬を見ると) 供犠と布施を奪い去る。それ故、よく考えて行動せよ。法を重んじる王よ、この犬を放棄せよ。このことにいささかの残酷なこともないのだ。」(10)

ユディシュティラは言った。

「誠実に奉仕するものを放棄することは、無量の罪深いものであると言います。それは、この世においてバラモン殺しを犯した罪に等しいものです。それ故、大インドラ神よ、自分の幸福を望むために、今日、この犬を決して放棄しません。(11)

私は恐れおののいている者を決して見捨てません。誠実に仕える者、「私には何もない」と言って苦しんでいる者、私の所に来た者、自分を保護する力の弱い者、生命を求める者、これらの者を私は見捨てません。命を捨てても、彼らを見捨てることなく、努力すべきである、ということ、これこそ私が永遠に求める誓戒です。」(12)

インドラ神は言った。

「いかなる施物、供物、供物を注がれた祭火であっても、これらを犬が見ると、これらをクローダヴァシャどもは奪い去るのだ。それ故、この犬を放棄せよ。この犬を放棄することによって、そなたは神々の国を得るであろう。(13)

勇士よ、そなたはそなたの兄弟、愛するドラウパディーさえも放棄して、そなた自身の行為によって、(至福の)世界を得た。どうして、この犬だけを放棄しないのか。そなたはすべてを放棄したのに、どうしてそのように逡巡しているのか。」(14)

ユディシュティラは言った。

「死ぬべき人間にとって、死んだ者と和合することはなく、敵対することもない、ということ、すべての世界において定められています。(兄弟とドラウパディーが死んだ時)私は彼らを再生できません。それで彼らを放棄しました。しかし、彼らが生きている間は、放棄しませんでした。(15)

誠実に奉仕する者を見捨てることは、保護を求める者をおびやかすこと、女性を殺害すること、バラモンの所有するものの窃盗、仲間を傷つけること、この四つのいずれにも等しい、と私は考えます。」(16)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

法を重んじる王ユディシュティラのこの言葉を聞いて、聖なるもの(犬)は本来の姿である法の神となり、喜びにあふれて、称讃をたたえた優しい口調で、人中のインドラであるユディシュティラに言った。(17)

「王のインドラよ、父祖の善行と英知を具え、すべての生類への慈悲心を具えて、そなたは生まれた。バラタ族の王よ。(18)

息子よ、ドヴァイタの森で、私はそなたを一度吟味したことがあった。その森でそなたの剛勇の弟たちは飲物のために倒れた。(19)

そなたは弟ビーマとアルジュナの二人を放棄して、(義理の)母の喜ぶことをしようと願って、ナクラの再生を望んだ。(20)

(今の場合)この犬が誠実に奉仕していることを考えて、(犬を放棄せずに)神々の車に乗るこ

とを放棄した。王よ、それ故、天国には、そなたに等しい者はいない。(21)

バラタ族の王よ、不滅の世界はそなた自身の本来の姿で、そなたのものとなった。そなたは無上の神聖なる境界を獲得した。」(22)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

それから、ダルマ神、シャクラ神、マルト神群、アシュヴィン神、その他の神々、神仙たちは、パンドウの息子(ユディシュティラ)を車に乗せて、(23)

天国へ進んだ。いかなる所へも意のままに進む者たちは、それぞれ自分の天車に乗って進んだ。すべての者は無垢で、福德を具え、言葉、知性、行為も清浄であった。(24)

クル族の後裔である王は、その車に乗り、威光で天地を輝かせつつ、速やかに上昇した。(25)

神々の集まりのなかにいたナーラダ仙、すべての世界のことに精通し、優れた話し手で、強力な苦行を具えた彼は、その時言った。(26)

「ここにすべての王仙が集まっているが、クル族の王ユディシュティラは、彼らの名声を越えて、優位に立っている。(27)

彼の名声と威光によって、善行為を完成したことによって、すべての世界を超越して、自己の(人間の)体を具えたままで、天国に到達した。パンドウの息子(ユディシュティラ)のほかに、このことを成し遂げた者を聞いたことはない。」(28)

ナーラダ仙のこの言葉を聞いて、法を重んじる王は神々や自分の仲間、王たちに挨拶して言った。(30)

「幸福な所であれ、不幸な所であれ、今、私の兄弟のいる所、そこに私は行きたいです。それ以外の世界を望みません。」(31)

王の言葉を聞いて、神々の王プランダラ神は親切な言葉を述べた。(32)

「王中のインドラよ、そなたはこの場所に住め。そなたの善行為によって勝ち得たところだ。そなたは、どうして人間的愛情にひきずられるのか。(33)

そなたは他の者が得ることのできないような最高の完成を得た。クル族の喜びの人よ、そなたの兄弟はこの境界に到達しなかった。(34)

王よ、人間的感情は今でも、そなたにつきまとっている。ここは天界だ。神の世界を住所とする神仙やシッダ聖者たちを見よ。」(35)

大知のユディシュティラは、神々の王に再び意義深い言葉を述べた。(36)

「ダイティヤの征服者よ、私は彼らを離れて住むことに耐えられません。私は兄弟が行った所に行きたいです。(37)

力強い体、黒ずんだ肌色、優れた知性と徳行を具えた女性の最上者ドラウパディーが行った所に行きたいです。」(38)

偉大なる旅立ちの巻 終わり

第十八巻 天国への昇天の巻

第一章

聖ガネーシャに帰命する。

ナーラーヤナに、人中の最上者ナラに、そしてサラスヴァティー女神に帰命して、勝利の祈りを捧げよ。

ジャナメージャヤは語った。

「古昔の私の先祖の方々、パーンドゥの息子たち、ドリタラーシュトラの王家の方々には神々の住む天国に行って、それぞれいかなる場所で過ごしているのですか。(1)

このことを聞きたいです。あなたは世にも稀な行為の大聖仙ヴィアーサの教えを受けた全能の知者である、と私は考えます。」(2)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

ユディシュティラなどをはじめとして、そなたの父祖が神々の天国に到達したのち、彼らが行ったことを聞け。(3)

法王ユディシュティラは天国に到達した時、ドゥルヨーダナが幸福に満ちて座席に座っているのを見た。(4)

彼は英雄の吉相に包まれて、太陽のように輝き、輝かしい神々や有徳のサーディヤ群と一緒にいた。(5)

ユディシュティラはドゥルヨーダナを見ると憤り、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）の幸福な様を見ると、すぐ背を向けた。(6)

彼は声高に連れもの者たちに言った。

「私はドゥルヨーダナと一緒に住みたくない。彼は食欲で達見なき者であるから。(7)

このために、以前に彼によってわれわれは大森林において苦悩を受けたが、われわれは戦いにおいて、彼のすべての領土、仲間、および親族を破壊した。(8)

また、パンチャーラの王女ドラウパディー、有徳で、申し分なき体で、われわれの妻である彼女は、長老たちの前で、集会のなかに引きずり出されたが、これ（彼が食欲で達見なきこと）のためであった。(9)

神々よ、私はスヨーダナを見たくない。私は私の兄弟がいる所へ行きたい。」(10)

ナーラダ仙は微笑みを浮かべて言った。

「王中のインドラよ、そのようにしてはなりません。天国に住んでいる限り、すべての敵対行為は禁止される。(11)

大きな腕のユディシュティラよ、ドゥルヨーダナに対して、そのように言わないで下さい。私の言葉を聞かれよ。(12)

このドゥルヨーダナ王は、天界に住む善人たちや王中の最上者たちによって、神々と共に尊敬されています。(13)

彼は戦いの聖火に、彼の体を供物として捧げたので、英雄の境界を獲得しました。地上において、神に等しいあなたやあなたの兄弟のすべてに対して、戦いにおいて、この者はそのように振る舞ったからです。(14)

この大地の王は、大きな恐怖の状態のなかで恐れることなく、クシャトリヤの法を守ったので、この境界を得ました。(15)

息子よ、あなたは賭博によって受けた(苦悩)を心に留めてはなりません。ドラウパディーの苦悩を考えないで下さい。(16)

そなたたちの親族から受けたその他の苦悩、あるいは戦いやその他のことにおける苦悩を思い出さないで下さい。(17)

今は、ドゥルヨーダナ王に礼儀正しく接して下さい。人中の主よ、ここは天国です。ここには敵意はないのです。」(18)

このように、ナーラダ仙に言われたが、クル族の王、大知を具えたユディシュティラは、弟たちのことを尋ねて言った。(19)

「この永遠なる勇士の世界が、ドゥルヨーダナのものとなり、大地がこの法を知らない邪悪の者の仲間となり、(20)

そのため、大地は人間も像も共に、たちまち壊滅し、そしてわれわれは激怒して苦悩し、恨みに報復したくなったのであるが、(21)

高德の英雄たち、偉大な誓戒を守る私の兄弟、約束を誠実に守る者、言葉に誠実な勇士たち、(22)

彼らが赴いた世界はいかなるものか。私はそれらを見たい。クンティー夫人の息子で、約束を誠実に守る高貴なカルナ、ドリシュタディウムナ、サーティアキ、ドリシュタディウムナの息子たち、クシャトリヤの義務を守って、武器による死に遭遇した戦士たち、(24)

バラモンよ、これらの王侯たちはいずこにいるのか。ナーラダ仙よ、ここに彼らを見ません。ナーラダ仙よ、ヴィラータ、ドルパダ、そしてドリシュタケートツなどの勇士を。(25)

パンチャーラの王子シカンディン、ドラウパディーの息子たち、戦いに無敵のアビマニユに会いたい。ナーラダ仙よ。(26)』

第二章

ユディシュティラは言った。

「神々よ、ここにラーダーの息子(カルナ)、無量の剛勇の彼を見ない。また、高貴な二人の兄弟(ナクラとサハデーヴァ)、ユダーマニユとウッタマウジャス、(1)

戦いの聖火に体を(供物として)捧げた偉大な戦士たち、私のために戦って死に遭遇した王や

王子たち、(2)

虎に等しい剛勇を持つ、これらの偉大な戦士たちは、どこにいるのですか。これらの人中の最上者たちは、いかなる世界を得たのですか。(3)

これらのすべての世界を世界を得たのであるならば、神々よ、私にその場所を教えてください。私は高貴な彼らと一緒に住みます。(4)

この清らかな不滅の世界をこれらの人々は獲得していません。私は彼らや兄弟と親族がいなければ、楽しくありません。(5)

(戦いが終わって、) 水供養の時に、『カルナに水を捧げなさい』という母の言葉を聞いて、私はその言葉によって、悲しみました。(6)

神々よ、私は次のことを繰り返し繰り返し悲しんでいます。偉大な心の持ち主カルナの両足と母の両足が似ていること。(7)

それに私が気づいた時、敵軍を悩ます勇士カルナを保護しなかった私は、両足を見て悲しみました。われわれがカルナと一体になれば、シャクラ神さえもわれわれを戦いにおいて征服することはできないでしょう。(8)

太陽神の息子(カルナ)がいる所はどこであろうとも、私は彼に会いたい。ああ、(彼が私の兄弟であることを)知らなかったので、私に命令されて、アルジュナは、彼を殺しました。(9) 恐るべき剛勇の持ち主で、自分の命よりも私に親密なビーマ、インドラ神のようなアルジュナ、ヤマ神に等しい双生児(ナクラとサハデーヴァ)にも会いたい。(10)

いつも法にかなった振る舞いのパンチャーラの王女(ドラウパディー)にも会いたい。私はここに留まりたくありません。真実を告げます。(11)

神々の最上の方々よ、兄弟を離れた私にとって、天国は何の役に立ちましょうか。私の兄弟がいる所、そこが天国です。ここは天国ではない、と私は考えます。」(12)

神々は言った。

「もし、そなたがそこに住みたいならば、息子よ、時を移すことなく、行きなさい。神々の王の指示に従って、われわれはそなたの気に入ることをするのだから。」(13)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

このように言ってから、神々は神の使者に指示して言った。

「そなたはユディシュティラを、彼の友人に会わせてくれ。」(14)

そこで、クンティー夫人の息子である王と神の使者、人中の雄牛たちのいる所へ、一緒に出発した、王中の虎よ。(15)

神の使者が先頭に進み、王は後に従った。その道は不浄で、難路で、悪行の者たちによって踏み荒らされていた。(16)

その道は暗黒に覆われて恐ろしく、青々と茂った苔と毛で覆われていた。罪人の悪臭で汚染され、肉と血と泥にまみれていた。(17)

虻や熊や蜜蜂や蚋が満ちていた。いたる所、動物の死体で隙間もないほど覆われていた。(18)
骨や髪が散乱して、うじ虫やその他の虫が満ちていた。すべては炎をあげる火に包まれていた。(19)

鉄の口を持つ鳥やその他の鳥、はげわしが横行していた。針のようなどがった口を持っていて、悪霊のようであり、ヴィンドヤ山のような者、それらの者によって引き裂かれた。(20)
脂肪や血で汚され、切り離された切り離された腕や腿や手、切り裂かれた腹や脚が、あちらこちらに散乱していた。(21)

死体の悪臭でとても不快な、身の毛のよだつ道を、法を重んじる王は、さまざまな考えに満たされながら進んだ。(22)

また、煮えたぎる水が満ちて、渡ることでできない川を見た。また、刀の葉を持つ樹林や剃刀の葉の生い茂る樹林を見た。(23)

熱く白い砂地や鉄の岩があった。いたる所に鉄の鍋があつて、油が煮えたぎっていた。(24)
鋭いとげのあるクータ・シャルマリカ樹(地獄で罪人を苦しめる木)があり、触れると大きな苦痛を与えた。クンティー夫人の息子は、罪人に対する、地獄の資め苦を見た。(25)

ユディシュティラは悪臭の満ちた場所を見て、神の使者に尋ねた。

「このような道を、われわれはどれだけ進まねばならぬのか。(26)

私の兄弟はどこにいるのか、教えてくれ。また、ここは神々の何という場所か知りたい。」(27)

法を重んじるユディシュティラ王の言葉を聞くと、神の使者は答えた。

「あなたの進路はこのようなものです。(28)

天界の住人たちは、(疲れたら)私の好きなようにせよ、と言いました。王のインドラよ、もしあなたが疲れたのなら、引き返しましょう。」(29)

ユディシュティラはその臭気のために気力を失い、心は混乱していた。パーラタよ、引き返す決心をして、きびすを返した。(30)

法を重んじる王は苦痛と憂悩に打ちのめされて、向きを変えた。その時、あちらこちらから、哀れな声があがるのを聞いた。(31)

「ああ、ああ、ガルマ神の息子よ、王仙よ、福德の家族に生まれた者よ、パードウの息子よ、われわれを救済するためにしばらく留まりたまえ。(32)

無敵の方よ、あなたがやって来るので、あなたの香りを伴って快い風が吹きます。そのために、われわれに幸福が近づきます。(33)

プリーター夫人の息子よ、人中の雄牛よ、最上の王よ、あなたに会って、長い期間、幸福にあずかりたいものです。(34)

大きな腕の方よ、バラタ族の王よ、もうしばらく留まって下さい。クル族の王よ、あなたがここにいる間は、苦悩はわれわれを襲いません。」(35)

このように苦悩する人々の哀れな、多くのさまざまな言葉が、ひっきりなしに語られるのを、

王はその場所で聞いた。(36)

慈悲深いユディシュティラは、気力を失って語る彼らの言葉を聞いて、立ちどまって、
「ああ、何と哀れなことよ」

と叫んだ。(37)

落胆し、苦しんでいるこれらの人々の言葉は、以前に幾度も聞いたのだが、パンドウの息子は（誰の声か）了別できなかつた。(38)

ダルマ神の息子ユディシュティラは、これらの言葉を了別できなかつたので、尋ねた。

「あなた方は誰ですか。どうして、ここにいるのですか。」(39)

このように問われると、その時、あちらこちらから、すべての者が答えた。

「私はカルナです。」「私はビーマセーナです。」「私はアルジュナです。」と。(40)

また、「私はナクラです。」「私はサハデーヴァです。」「私はドリシュタディウムナです。」「私はドラウパディーです。」「私はドラウパディーの息子です。」と。王よ、このように彼らは声高に叫んだ。(41)

その時、王よ、これらの叫び声を聞いて、ユディシュティラ王は深く考えた。

「運命が行ったこのことは、何たることだ。(42)

これらの高貴な者たち、カルナやドラウパディーの息子たち、そしてパンチャーラの美しい腰の王女、これらの者は悪臭の満ちたとても恐ろしいこの場所にいるが、彼らの犯した不浄な行為とは何か。彼らは皆清浄な行為をする者たちで、彼に帰することのできる悪行を、私はまったく知らない。(43~44)

ドリタラーシュトラの息子であるスヨーダナ王とすべての悪行の従者たちは、何を行って幸運にあずかったのか。(45)

彼（スヨーダナ王）は大インドラ神のように、福德に恵まれ、尊敬されている。一方、これらの高貴な者たちが、地獄に落ちたが、この異常な姿は、誰のものか。(46)

彼らは皆、すべての義務をわきまえ、勇敢であり、真実とヴェーダ聖典に献身していた。クシャトリアの義務を守り、善人であり、祭式を執行し、バラモンに豊富な謝礼を施した。(47)

私は、眠っているのか、それとも目覚めているのか。私は思慮があるのか、それともないのか。これは心の錯乱であろうか。それとも心の迷いか。』(48)

ユディシュティラ王は、心は悲哀と苦悩に満たされ、感覚は心配のために混乱して、このようにいろいろと考えに耽った。(49)

それから、ダルマ神の息子は、烈しい怒りを走らせた。ユディシュティラは神々を、またダルマ神さえも非難した。(50)

彼はひどい悪臭に悩みながら、神の使者に言った。

「そなたを使者とした神々のいる所へ帰りたまえ。(51)

私はそこには行かぬ。私はここに留まる。このように神々に告げてくれ。私を頼りとするこ

によって、この苦しんでいる兄弟は安楽となるのだから。」(52)

このようにパーンドウの賢明な息子に言われて、神の使者は神々の王シャクラツ神がいる所へ行った。(53)

そして、彼はユディシュティラの意図することを、ダルマ神の息子が述べた通りに、すべてを報告した。(54)

第三章

ヴァイシャンパーヤナは語った。

法を重んじる王ユディシュティラ、プリーター夫人の息子がしばらく留まっている時、そこにインドラ神を先頭にして、神々がやって来た。(1)

ダルマ神は化身して、クル族の王ユディシュティラがいる所に、王に会うためにやって来た。(2)

輝かしい体、清らかな血族、清らかな行為の神々が到来すると、その暗黒は消滅した。(3)

邪悪な行為を加える者たちが与える地獄の責め苦は、もはや見られなかった。ヴァイタラニー川(地獄の川)、とげのあるサルマリー樹も。(4)

鉄の壺、岩石、これらの見るも恐ろしいものが姿を消した。クル王は、そこに隙間なく散乱した多くのぞっとする死体を見たのだったが、それらは視界から消えた。

その時、心地よく触れる、幸福な香りの漂う、こよなく清らかな風、(5~6)

とても冷涼な風が、神々が近づく所に吹き始めた。インドラ神、マルト神群、アシュヴィン双神、ヴァス神群、(7)

サーディヤ神群、ルドラ神群、アーデイトヤ神群、その他の天界の住人たち、またシッダ群や聖仙の最上者たち、これらすべての者が、ダルマ神の息子である威光に輝く王のいる所にやって来た。輝かしい栄光を具えた神々の王シャクラ神は、(8~9)

ユディシュティラに語りかけた。それは彼を慰める言葉であった。

「大きな腕のユディシュティラよ、不滅の世界はそなたのものとなった。(10)

来たまえ、来たまえ。人中の虎よ、これら(の幻影)は終わった。清らかな者よ。大きな腕の者よ。そなたはすべてを完成した。不滅の世界はそなたのものとなった。(11)

そなたは怒りを起こしてはならぬ。私の言葉を聞け。親愛なる者よ。すべての王は必ず地獄を見なければならぬ。(12)

人中の雄牛よ、そこには善と悪の二つの堆積がある。最初に善行為の果報を享受した者は、後で地獄に行かねばならぬ。(13)

しかし、始めに地獄(の苦悩)を受けた者は、後で天国に赴く。罪深い行為の者は最初に天国を楽しむ。(14)

王よ、このため、このようにそなたは(最初に地獄に)赴いた。王よ、それは私がそなたによ

いことをしようと望んだからだ。そなたは、ドローナの息子について、ドローナをあざむいたことがあった。(15)

王よ、そなたのあざむいた行為によって、そなたは地獄を見ることとなった。

そなたと同様に、ビーマもプリターの息子も、双生児（ナクラとサハデーヴァ）も、(16)

ドラウパディーも、クリシュナも、詐欺の行為によって、地獄に赴いた。人中の虎よ、来たれ。彼らは皆、罪悪から解放された。(17)

そなたに味方した者たち、戦いに倒されたプリターの息子たち、これらすべての者は天国を得た。彼らを見よ。バラタ族の雄牛よ。(18)

偉大な弓手カルナ、武器をとるすべての者の中の最上者も、最高の完成（siddhi）を得た。そのことをそなたは苦悩していたのだが。(19)

主よ、見よ、人中の虎、太陽神の息子（カルナ）を。彼は自身にふさわしい場所にいるのを。大きな腕の者よ、人中の雄牛よ、苦悩を捨てよ。(20)

見よ、そなたの兄弟やその他の自分の味方となった王たちを。彼らはそれぞれ自分にふさわしい（幸福の）場所に達した。そなたの心の痛みを捨てよ。(21)

クル族の王よ、最初に苦痛を受けて、これより彼は、苦悩を去り、健全となって、私と一緒に楽しく過ごそう。(22)

友よ、善良な行為の果報、自ら苦行によって得た果報、布施の果報を享受せよ、王よ。(23)
今や、神々やガンダルヴァ、そして天界の天女たちは、清らかな衣装と立派な飾りをつけて、そなたの幸福のために奉仕せよ。(24)

大きな腕の者よ、ラージャスーヤ祭によってそなたが得た（至福の）世界、三日月刀によって得た幸運を、今こそ享受せよ。そなたは苦行の偉大な果報を得たのだ。(25)

ユディシュティラよ、そなたが住むであろう世界は諸王のその上方にある。プリターの息子よ、彼らはハリシュチャンドラ王のそれに等しい。(26)

王仙マーンダートリのいる所、バギーラタ王のいる所、ドゥシュヤンタの息子バラタのいる所、そこでそなたは愉快に過ごすであろう。(27)

プリターの息子よ、ここに清浄で、三界を清める聖なる川がある。それは天界のガンガー川である。そこで沐浴して、そなたは進むであろう。(28)

この流れに沐浴して、そなたの人間の性状は消滅するであろう。悲しみは消え去り、悩みはなくなり、敵意から解放されるであろう。」(29)

クル族の王よ、神々のインドラがこのようにクル族のインドラ、ユディシュティラに言っている時、ダルマ神は自己本来の姿をとって具現して、直接に自分の息子に言った。(30)

「おお、息子よ、英知の者よ、（そなたの）私への献身、誠実な言葉、忍耐、自己の抑制を、大変嬉しく思う。(31)

実にこれは私がそなたに課した第三の試練である。プリター夫人の息子よ、そなたは自分の性

質に基づくことからはずれたことをすることはできない。(32)

以前に私はドヴァイタの森でそなたに間を与えて、そなたを試したことがあった。そなたは引火木を元通りにすることを、立派に成し遂げた。(33)

バーラタよ、ドラウパディーも共に、そなたの兄弟が倒れた時に、私は犬の姿をとって、再びそなたを試した。(34)

そなたは兄弟のために、地獄に留まることを望んだ。これが第三の試練であった。偉大な幸運の者よ、そなたは清浄となった。罪は清められ、幸福な者となった。(35)

ブリター夫人の息子よ、王よ、そなたの兄弟は地獄にふさわしいような者ではない。これはすべて神々の王マヘンドラが作り出した幻影だった。(36)

親愛なる者よ、すべての王は必ず地獄を見なければならぬ。それで、しばらくの間、そなたはこの最高の苦悩を受けたのだ。(37)

王よ、アルジュナも、ビーマも、人中の雄牛である双生児も、言葉に誠実で勇敢なカルナも、地獄に長く留まる必要はまったくないのだ。(38)

ユディシュティラよ、王女クリシュナー（ドラウパディー）も地獄に留まる必要はまったくないのだ。来たまえ、来たまえ、バラタ族の最上者よ。三界を流れるガンガー川を見よ。」(39)

あなたの祖父である王仙は、このように言われると、ダルマ神と一緒に進んだ。(40)

清浄で、罪を清める聖なる川、聖仙たちが称えるガンガー川で沐浴して、王は人間の体を捨てた。(41)

そして、聖なる姿をとり、法を重んじるユディシュティラ王は、その水で沐浴して、すべての敵意を滅し、苦悩を消滅した。(42)

それから、クル王ユディシュティラは神々に囲まれて、進んだ。ダルマ神に付き添われ、大聖仙たちに称賛されながら。(43)

彼は人中の最上者たち、英雄たち、パーンドゥの者たちやドリタラーシュトラの者たちが、怒りから解放されて、それぞれ自分の状態を楽しんでいる所へ進んだ。(44)

第四章

ヴァイシャンパーヤナは語った。

それから、ユディシュティラ王は神々、マルト神群、聖仙たちに称えられて、クル族の雄牛たちのいる所へ進んだ。(1)

彼はとても美しい姿のゴーヴィンダ（クリシュナ）を見た。それは以前に見たことのある姿で、よく見慣れたものであった。(2)

彼は自分の本来の姿をとって光り輝いていて、恐るべき円盤をはじめ、聖なる武器をたずさえていたが、それらは人間の姿をとっていた。(3)

クンティー夫人の息子は、自己本来の姿をとっているマドゥの殺戮者（クリシュナ）を見た。

彼は勇敢な、とても輝かしいパールグナ（アルジュナ）によって尊敬されていた。(4)

神々が尊敬するこの二人の人中の虎は、ユディシュティラを見ると、ふさわしい尊敬をもって彼を迎えた。(5)

他の場所で、クル族の喜びの人は、武器の使い手の最上者カルナを見た。彼は十二の太陽の輝きを具えていた。(6)

また、他の場所にマルト神群に囲まれているビーマセーナを見た。彼は驚くべき美しい姿であった。(7)

彼は化身して現れた風の神の傍に、聖なる姿で座っていた。最高の栄光を具え、最高の完成に達していた。(8)

また、クル族の喜びの人は、アシュヴィン双神の場所に、ナクラとサハデーヴァを見た。いずれも自分の威光に輝いていた。(9)

彼は、また、蓮の花冠をつけたパンチャーラの王女を見た。彼女は自分の本来の姿のままて天国に来て、太陽のように輝く姿で立っていた。(10)

ユディシュティラ王は、すぐすべてのことを彼女に尋ねたくなった。すると、尊い神々の王インドラは彼に言った。

「これは美の神（シュリー）だ。そなたのために、ドルバダ王の娘の姿をとって人間世界に現れた。ユディシュティラよ、彼女は母胎から生まれたのではない。心地よい芳香を持ち、世の人々に愛される女性である。(12)

そなたに喜びを与えるために、彼女は槍を持つ神（シヴァ神）によって創造されたのだ。彼女はドルバダ王の王家に生まれ、そなたたちと共に生活した。(13)

王よ、火のように輝く、大幸運のこれらの五人のガンダルヴァたちは、ドラウパディーと無量の精気を具えたそなたの息子である。(14)

見よ、賢明なガンダルヴァの王ドリタラーシュトラを。この者をそなたの父の長兄と知れ。(15)

ここにいるのはそなたの長兄であり、クンティー夫人の息子で、火のように輝いている。御者に最初に生まれた息子で、人中の最上者であるこの者は、(養母) ラーダーの息子として知られている。(16)

彼は太陽と共に進む。見よ、この人中の雄牛（カルナ）を。サーディヤ神群、神々、ヴィシュヴァ神群、マルト神群、(17)

王中の王よ、これらの群れの中にあるヴリシュニ族とアンダカ族の偉大な戦士たちを。サーティアキを先頭にするこれらの英雄とボージャ族の大強力の勇士たちを。(18)

見よ、無敵の勇士、ソーマと一緒にいるスバドラの息子（アビマニユ）を。この偉大な弓手アビマニユは月光に等しい光をたたえている。(19)

ここにいるのは偉大な弓手パーンドゥで、クンティー夫人とマドリー夫人と一緒になってい

る。そなたの父はいつも天空車に乗って、私の所に来る。(20)

見よ、シャーントヌの息子ビーシュマを。彼はヴァス神群と共にいる。プリハスパティの傍らに居るのは、そなたの師ドローナと知れ。(21)

パーンドゥの息子よ、そなたの味方となったこれらや、その他の王たちが、ガンダルヴァ、ヤクシャ、聖なる者たちと一緒に歩いている。(22)

王侯のある者はグヒヤカの世界を得た。彼らは肉体を捨てて、彼らの清浄な言葉、思考、行為によって、天国を勝ち得た。」(23)

第五章

ジャナメージャヤは尋ねた。

「ビーシュマとドローナ、これら二人の大威徳の方々、ドリタラーシュトラ王、ヴィラータとドルバダの二人、シャンカ、ウッタラ、(1)

ドリシュタケート、ジャヤトセーナ、サティアジト王、ドゥルヨーダナの息子たち、スヴィラの息子シャクニ、(2)

勇猛なカルナの息子たち、ジャヤドラタ王、ガトートカチャ、その他のそなたが述べなかった者たち、(3)

その他、輝かしい勇敢な王たち、彼らは天国でどれだけの期間を過ごしたか、それを私に教えて下さい。(4)

再生族の最上者よ、彼らの場所は天国における最も願わしい、輝かしい世界ですか。また、彼らの行為が終わった時に、これらの人中の雄牛たちは、いかなる境界を得たのですか。(5)

再生族の最上者よ、私はこれを聞きたいです。それでお尋ねしました。あなたは輝かしい苦行によって、すべてを洞察しているからです。」(6)

サウティは言った。

「このように尋ねられると、再生族の聖仙は大威徳のヴィアーサの同意を得て、王の質問に答えた。」(7)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

人王よ、いかなる者も行為が終わった時に、本来の自己に帰ることはできないか、どうか、とそなたはよい質問をした。(8)

バラタ族の雄牛よ、この神々の秘密であることを聞け。威光に輝き、天眼を具え、偉大な剛勇の方が説いたことだ。(9)

クル族の王よ、その方はパラージャラの息子で、古代の苦行者であり、偉大な誓戒を守り、深遠な知恵を持ち、全知であり、すべての行為について、それによって得られる境地の知者である。(10)

彼の説く所によれば、なすべき行為が終わった時に、人々は自己本来の体にはいる。大威徳

を具え、栄光に輝くビーシュマは、ヴァス神群の地位に帰った。(11)

バラタ族の雄牛よ、(彼は八番目のヴァス神となったので、)今では八ヴァス神が認められる。ドローナは、アンギラス族の最上者ブリハスパティにはいった。(12)

フリディオの息子クリタヴァルマンは、マルト神群にはいった。プラディウムナは、サナトクマーラにはいった。彼が生まれて来た所だ。(13)

ドリタラーシュトラは、財宝主の世界を得た。とても得難い所だ。令名高いガンダーリー夫人は、(彼女の夫)ドリタラーシュトラに随伴した。(14)

パンドゥは、二人の妻を伴って大インドラ神の住居に帰った。ヴィラータとドルパダの二人、およびドリシュタケート王。(15)

ニシャタス、クルーラサーンバス、バーヌ、カンパ、ヴィドゥーラタ、プーリシュラヴァス、シャラ、プーリ王。(16)

カンサ、ウグラセーナ、ヴァスデーヴァ、ウツラ、弟シャンカを伴った人中の最上者。(17) これらすべての人中の最上者が、神々の宇宙の主にはいった。ヴァルチャスというソーマの息子は威光に輝き、勇猛であった。(18)

彼は人中の獅子パールグナの息子アビマニユとなった。彼はクシャトリヤの義務を守って、他の人がどこでもできないほどに戦って。(19)

正義を守る偉大な戦士は、その行為の終末に月神(ソーマ)にはいった。人中の雄牛よ、カルナは打ち倒されて太陽神にはいった。(20)

シャクニはドヴァーパラに、ドリシュタディウムナは火の神にはいった。ドリタラーシュトラの息子たちは皆、兇暴な力を持つ妖精(ヤーツダーナ)であった。(21)

幸運に恵まれた高貴な彼らは、武器による死に清められて、天国に行った。ユディシュティラ王はダルマ神にはいった。(22)

尊い神聖な竜王安ナンタは地下界にはいった。父祖神の命令によって、彼はヨーガの力によって大地を支えた。(23)

ヴァースデーヴァは行為の終末にナーラーヤナという神々の神、永遠なる神にはいて、その神の一部分となった。(24)

一万六千の女性がヴァースデーヴァの妻となった。ジャナメージャヤよ、適切な時に、彼女たちはサラスヴァティー川で沐浴した。(25)

彼女たちは、そこに肉体を捨てて、再び天国に昇った。彼女たちは天女(アプサラス)となって、ヴァースデーヴァの近くに座った。(26)

ガトートカチャをはじめ、勇敢な優れた戦士たちは、大戦闘に打ち倒されて、ある者は神々の地位を、ある者はヤクシャの地位を得た。(27)

ドゥルヨーダナの援助者として戦った羅刹たちは称賛された。王よ、彼らは次々に、すべての最高の世界に昇った。(28)

これらの人中の雄牛たちは、ある者は大インドラ神の住所に、ある者は大知のクペーラ神の住居に、ある者はヴァルナ神の住居にはいった。(29)

大きな輝きを持つ者よ、私はそなたに、クル族とパンドウ族の者たちの行為のすべてを、詳細に語った。バーラタよ。(30)

サウティは語った。

再生族の最上者よ、供犠祭の合間にこのことを聞いて、ジャナメージャヤ王はとても驚嘆した。(31)

祭官は王の祭式を完了した。アースティーカは(恐ろしい死から)蛇どもを救って喜んだ。(32) ジャナメージャヤ王はすべてのバラモンに謝礼を施して満足させた。このように王にもてなされてから、彼らは来た道を帰った。(33)

これらの学識あるバラモンを去らせてから、ジャナメージャヤ王はタクシャシラーから象(ハスティン)に因んだ名の都(ハスティナ・ブラ)へ帰った。(34)

蛇供犠祭の時に、ヴィアーサ仙の指示で、ヴァイシャンパーヤナが王に語ったすべてを、私は今語った。(35)

それは伝説と呼ばれて、清めてくれるものであり、卓越したものである。バラモンよ、真実を語る苦行者クリシュナによって創作された。(36)

彼は全知で、すべての規定に精通し、すべての義務(ダルマ)の知識を具え、敬虔で、感官の領域を超えたものをヨーガの力で認識する能力があり、清純で、苦行によって心を清め、(37) 自在力に努力し、サーンキヤ・ヨーガに専念する。さまざまな知識で清められた天眼ですべてを洞察して、これを創作した。(38)

彼は高貴なパンドウの息子たちや、広大な権力と威光を持つ他のクシャトリヤたちの名声を世に博めようと願って、これを創作した。(39)

月の周期の変わる日に、いつもこれを詠唱して聞かせる学識者は、すべての罪悪を清め、天国を得て、ブラフマンに帰入することができる。(40)

ヴィアーサが創作したこのヴェーダ聖典のすべてを熱心に聞く者は、バラモンの殺害やその他の百万の大罪さえも消滅される。(41)

シュラーツダ祭(祖先の祭儀)に、ごくわずかな詩句だけでも詠唱する者の祖先は、尽きることのない食物と飲み物を得る。(42)

昼間に感官あるいは心で犯した罪は、マハーバーラタを語ることによって、夜になる前にそれから解放される。(43)

夜にバラモンが女性たちのなかで犯した罪は、マハーバーラタを語ることによって、夜明け前に、それから解放される。(44)

偉大な性質(マハトヴァ)であるから、また重要なもの(バーラヴァト)であるから、マハーバーラタと呼ばれる。これの解説を知る者はすべての罪悪から解放される。(45)

十八プラーナ（史話）、法典群、ヴェーダ聖典のすべては、一緒になって、一つのバーラタ（物語）として確立している。（46）

高貴な聖仙たちが、十八プラーナとヴェーダ聖典の大海について獅子吼するのを聞け。⁽⁴⁷⁾

島生まれのクリシュナ（＝ヴィアーサ）、尊い牟尼はこの史話（プラーナ）、このすべてのバーラタ物語を三年で創作した。（48）

「勝利」という名を持つ偉大なバーラタ物語をいつも敬信の心で聞くならば、幸運と栄誉と学識が一緒になって、つねに得られる。（49）

正義（ダルマ）に、福利（アルタ）に、願望（カーマ）に、解脱（モークシャ）に関して、このなかにあることは他の所にもある。このなかにはないものは、他の所にもない。（50）

この史話は「勝利」という名を持つ。解脱を願う者、バラモン、王、胎児を得たいと願う女性は聞くべきである。（51）

天国を願う者は天国を得る。勝利を願う者は勝利を得る。胎児を得たいと願う女性は息子や、とても幸運な娘を得る。（52）

島生まれのクリシュナ（ヴィアーサ）、常に成功する人、解脱している人、彼は正義（ダルマ）を願って、このバーラタ物語を創作した。（53）

彼は他の編集を作成した。60×10万の詩頌から成る。そのなかで、30×10万頌は神々の世界に与えられている。（54）

15が父祖の世界に、14がヤクシャの世界に述べられている。10万頌が人間界について述べられている。（55）

ナーラダ仙は（バーラタ物語を）神々に詠唱して聞かせた。アシタ・デーヴァラは父祖に、シュカは羅刹と夜叉に詠唱した。ヴァイシャンパーヤナは人間に詠唱した。（56）

この叙事詩（itihāsa）は神聖で、意義深いものであり、ヴェーダ聖典に等しい。バラモンの前で、ヴィアーサが説いたこれを聞く者はそれによって、（57）

その人はこの世においてすべての望むものと名声を得て、最高の完成に達する。これに疑いはない。（58）

最高の清らかな信仰と深い信心をもって、そのわずか一行の学びによってさえも、バラタ物語の読誦とその福德によって、そのようになる。

（昔、聖仙ヴィアーサは）この福德に満ちた編集を息子のシュカに詠唱させた。（59）

数千の父や母、数百の息子や妻が、この輪廻の世に現れて、去って行く。他のものも（現れて）去って行くであろう。（60）

数千の喜びの状態が現れ、恐怖の状態が現れて、日に日に愚かな者たちにとりつくが、賢い者にはとりつかない。（61）

私は腕をあげて、声高に叫ぶが、聞こうとしない者がいる。福利（アルタ）も快樂（カーマ）も、正義（ダルマ）から生じる。どうして、正義を実践しないのか。（62）

貪欲から、恐怖から、快樂から、正義（ダルマ）を捨ててはならぬ。正義は生命の根源である。正義は永遠である。快樂と苦悩は永遠ではない。生命は永遠である。しかし、このもの（肉体を具えた生命ある者）の根源は永遠ではない。(63)

夜明けに目覚めて、バーラタ物語のサーヴィトリー篇を朗誦する者は、このバーラタ物語の功德を得て、最高のブラフマン（梵）に到達する。(64)

聖なる海とヒマラヤ山の二つが、宝玉の貯蔵所と言われるように、このバーラタ物語もそのようなものと言われる。(65)

学識ある者は、ヴィアーサガが編集したこのヴェーダ聖典を詠唱して財富を得る。熱心にこのバーラタ物語を詠唱する者は、最高の完成に到達する。これに疑いはない。(66)

島に生まれた聖者の唇から流れたこの物語は、無量なもので、心を浄化するものであり、罪を清め、吉祥である。バーラタ物語が詠唱されるのを傾聴する人にとって、（聖なる浴場）プシュカラの水をそそぐ必要があるだろうか。(67)

こよなく博識のヴェーダ聖典の知者であるバラモンに、黄金の角を持つ数百の牛を与える者、また福德に満ちたバーラタ物語をいつも聞く者は、そのいずれの者にも等しい果報がある。(68)

天国への昇天の巻 終わり

以上、マハーバーラタ終わり。

マハーバーラタ聴聞の偉大な功德

ジャナメージャヤは尋ねた。

「尊い方よ、賢者はいかなる方式によってバーラタ物語を聞くべきですか。いかなる果報が得られますか。詠唱のなかで、何という神々が供養されますか。(1)

尊い方よ、（詠唱が続いている間に）周期が変わるそれぞれの日に、何を施すべきですか。いかなる詠唱者が奉仕すべきですか。これらを私に教えて下さい。」(2)

ヴァイシャンパーヤナは語った。

王よ、聞きたまえ、いかなる方式であるのかを。また、バーラタ物語を聞くことによって、いかなる果報があるのかを。王のインドラよ、あなたが私に尋ねたことだ。(3)

大地の王よ、天国の神々は遊戯のために大地にやって来た。その目的をなし終えると、天国へ帰った。(4)

さあ、私が説明することをよく注意して聞きたまえ。地上に聖仙と神々が現れることを。(5) この（物語の）なかに、永遠なる神々、ルドラ神、サーディア神群、ヴィシュヴァデーヴァ群、アーディトヤ群、アシュヴィン双神、世界の守護者たち、大聖仙群、(6)

グヒアカ群、ガンダルヴァ群、ナーガ群、およびヴィディアードラ群、シッダ聖者群、ダルマ

神、自存神（スヴァヤンブー）、カーティヤーヤナ牟尼、(7)

山々、海、川、天女の群れ、ならびに星辰、年、半年、季節、(8)

動くもの・動かないもの、スラとアスラのすべての宇宙がバーラタ物語のなかにおいて、すべて説かれているのが認められる。(9)

彼らの確固たる名声を聞いて、彼らの名前と偉業を詠唱することによって、人々は恐ろしい罪悪を犯しても、即座に救われる。(10)

この叙事詩をはじめから順序正しく聞いて、心が抑制され、清浄となって、バーラタ物語の終末に達したら、(11)

バラタ族の者よ、彼ら（物語に述べられた最上者たち）に、祖先祭の供物を捧げるべきである。バラタ族の雄牛よ、バーラタ物語を聞いたなら、バラモンたちに、力に応じて、敬信の念をもって、(12)

多大な布施をすべきである。種々の宝石、牝牛、牛乳のための真鍮の容器、あらゆる装飾品を飾り、すべての望みの徳を具えた乙女たち、種々の乗り物、美しい邸宅、土地、衣服、黄金を施すべきである。(13~14)

乗り物、馬、元気な象、寝台、乗り物の駕籠、よく飾りたてた車を施すべきである。(15)

家にある最良のものや大きな価値のある財宝は言うに及ばず、自分自身、妻、子供をも、バラモンに施すべきである。(16)

バーラタ物語を聞くことを望む者は、疑念を離れ、好意ある喜びの心で、力に応じて順序正しく聞いて、終末に至ったら、力に応じて、大きな敬信の念をもって（布施をなすべきである）。(17)

真実であることと誠実であることに専念し、自己を制御し、清浄で、純潔であり、信仰心を具え、怒りを抑制することは、いかにして完成されるか、それを聞かれよ。(18)

(人は次のような人物を詠唱者とすべきである)

清浄な者、戒律を守る行為の者、白布をまとう者、感官を制御している者、心身が清らかな者、すべての論典に精通している者、深信を具え、不平を口にしない者、(19)

美しい顔だちで、とても幸運で、自己を制御し、真実を語り、感官を抑制しており、施物と尊敬を受ける人物が詠唱者とされるべきである。(20)

詠唱者は安楽に座り、よどむことなく、早すぎることもなく、莊重に、力強く、語句の発声を乱すことなく、音調の正しい状態を具えて、詠唱すべきである。(21)

(言語の)六十三文字を八カ所（胸、咽喉、頭、舌根、齒、鼻、唇、口蓋）から発声して、全靈をこめて詠唱すべきである。(22)

ナーラーヤナ神、人中の最上者ナラ、女神サラスヴァティーを恭敬して、「勝利」(ジャヤ)の祈りを捧げよ。(23)

バラタ族の王よ、バーラタ物語をこのような詠唱者から聞くと、誓戒を守る、清浄な聴聞者は、

聴聞のよき果報を得る。(24)

第一巻の詠唱が完成した時に、(聴聞者は)好ましい施物でバラモンを満足させるべきである。こうして、人はアグニシュトーマ祭の果報を得る。(25)

彼は天女の群れが満ちた立派な天国の車を得る。彼の心は喜びにあふれ、神々と一緒になって、心は乱れることなく、天国へ進む。(26)

第二巻の詠唱が完了した時に、(聴聞者は)アティラートラ祭の果報を得る。彼はあらゆる宝石で作られた天国の車に乗る。(27)

天国の花環と衣服をまとい、天国の芳香をただよわせ、天国の腕環をつけて、いつも天国において尊敬される。(28)

第三巻の詠唱が完成した時に、十二日祭(ドヴァーダシャーハ、ソーマ祭の一種)の果報を得る。彼は神のように数万年間天国に住む。(29)

第四巻の詠唱が完成した時に、ヴァージャペーヤ祭の果報を得る。

第五巻において、二倍の果報を得る。昇った太陽のような、燃え上がる火のような、(30)天国の車に、神々と一緒に乗って、天国に行く。そして、天国のインドラ神の住居において、数万年を楽しく過ごす。(31)

第六巻において二倍、第七巻において三倍の果報が彼のものとなる。カイラーサ山の頂上のような、瑠璃や宝石で作られた祭壇が(32)

たくさん置かれ、宝石や珊瑚で飾られ、意のままに進む天国の車、天女の群れが満ちた天国の車に乗って、(33)

彼は第二の太陽のように、全世界を遊歴する。

第八巻において、ラージャスーヤ祭の果報を得る。(34)

彼は昇る月のような天国の車に乗る。その車には月光のような色の、意の速さを持つ馬がつながれている。(35)

彼には、月よりも魅力的な顔の貴婦人たちが、腰帯の音や足飾りの音をたてながら奉仕する。(36)

とても素晴らしい女性たちの膝に安らかに眠り、そして目覚める。

バラタ族の者よ、第九巻の詠唱が完成した時に、彼は祭式の王である馬祠祭の果報を得る。(37)

黄金の柱で支えられた小塔を持ち、猫目石で作った座席を具え、純金で作った聖なる窓がすべての方位にあり、(38)

天女の群れ、ガンダルヴァの群れ、天国の住者たちが奉仕する車に乗って、彼は最高の栄光に包まれて輝く。(39)

天国の花環と衣服をまとい、天国の白檀香を塗り、彼は第二の神のように、天国において神々と一緒に楽しく過ごす。(40)

第十巻の詠唱が完成した時に、彼はバラモンたちに敬意を表して、(素晴らしい天国の車を
得る。その車は) 鈴の網の音を鳴らし、旗やのぼりを飾り、(41)

宝石で作った座席を具え、猫目石などの宝石で作った塔門があり、黄金の網をめぐらし、頂上
には珊瑚で作った尖塔があり、(42)

歌の上手なガンダルヴァや天女が飾りとなっている、善行の者の住居にふさわしい天国の車を
容易に手に入れる。(43)

彼は、火のように輝く王冠をかぶり、黄金の飾りをつけ、天国の白檀香を体に塗り、天国の花
環で飾られて、(44)

あらゆる天国の楽しみごとを楽しみながら、神々の恩恵によって最高の栄光を具えて、天界を
遊歴する。(45)

このようにして、彼は長い年の間、天国において尊敬される。それから、ガンダルヴァたち
と一緒に、満二万一千年の間、(46)

楽しいインドラ神の都で、インドラ神と一緒に幸福に過ごす。彼は天国の車や駕籠に乗り、さ
まざまな世界で、(47)

天国の貴婦人たちに囲まれて、恰も神のように生活する。それから太陽神の住居に、また月の
神の住居に、(48)

シヴァ神の住居に行く。王よ、彼はヴィシュヌ神と一緒に、同じ世界に住むことになる。大王
よ、まさしくこのようなのだ。これを疑ってはならぬ。(49)

これらは信仰心をもって実現されるべきである。私の学師はこのように語られた。詠唱者に
は、彼が心に望むすべてのものを与えるべきである。(50)

象、馬、車、駕籠、特に動物と動物が曳く乗り物、一對の腕環、一對の耳環、肩にかける聖
紐、(51)

最上の美しい衣装、特に香料を与えるべきである。彼を神のように尊敬せよ。そうすることによ
って、人はヴィシュヌ神の国を得る。(52)

これより、バーラタ物語の各章が詠唱された時に、バラモンに対して与えるものとしてあげ
るべきもの、それらを私は説明しよう。(53)

バラタ族の雄牛よ、生まれ、国、誠実な心、高貴な精神、正義(ダルマ)、品行、これらをわ
きまえて、(与えるべきである)。(54)

詠唱の行務が始められる時に、最初に幸運の祈りの言葉をバラモンたちに述べて、一章の詠唱
が終わった時に、自分の力を尽くしてバラモンをねんごろにもてなすべきである。(55)

王よ、最初に、立派な衣服をまとい、芳香ある香料をつけた詠唱者に、最上の蜂蜜と牛乳で
煮た食物を作法に従って食べさせよ。(56)

王よ、アースティーカの巻が詠唱される時、バラモンたちは果実と根菜、牛乳で煮た、蜂蜜、
牛酪、砂糖を添えた米飯を施され、馳走されるべきである。(57)

王のインドラよ、賭博場の巻が詠唱される時には、種々の菓子や糖菓などをまじえた供物をバラモンたちに食べさせるがよい。(58)

パンドゥ兄弟の森林生活の巻が詠唱される時には、果実と根菜で優れたバラモンたちを満足させるべきである。

林住の巻に到達した時には、水の満ちた水がめを与えるべきである。(59)

また、優れた滋養のあるもの、米と果実と根菜、あらゆる望ましい性質を持つ食物を、バラモンたちに与えるべきである。(60)

ヴィラータの巻の詠唱の時には、種々の衣装を与えるべきである。

和平への努力の巻の詠唱の時には、バラタ族の最上者よ、バラモンたちを香料と花環で飾って、あらゆる望ましい性質の食物を与えるべきである。

王のインドラよ、ビーシュマの巻の詠唱の時には、最上の乗り物を与えて、⁽⁶¹⁻⁶²⁾よく料理された、あらゆる望ましい性質の食物を与えるべきである。

ドローナの巻の詠唱の時には、最高に称賛される食物をバラモンたちに与えるべきである。(63)

王のインドラよ、また、矢、弓、立派な刀剣を与えるべきである。

カルナの巻が詠唱される時にも、同様にあらゆる好ましい性質の食物、(64)清らかで、よく料理されたものを、心を抑制した者はバラモンに与えるべきである。

シャリヤの巻の詠唱の時には、王のインドラよ、糖菓や砂糖を添えた米飯、(65)小麦の菓子、滋養のあるもの、あらゆる食物を提供すべきである。

夜襲の巻の詠唱の時にも、同様に豆を混じた食物を与えるべきである。(66)

女性の巻の詠唱の時には、バラモンの最上者たちを、宝玉を与えて満足させるべきである。

アイシーカ(葦)の巻の詠唱の時には、牛酪で煮た米をまず施して、(67)それから、よく料理された、あらゆる好ましい性質の食物を施すべきである。

寂静の巻の詠唱の時にも同様に、バラモンたちに供物を与えてもてなすべきである。(68)

馬祠祭の巻に到達した時には、あらゆる望ましい性質の食物を与えるべきである。

隠棲所の巻の詠唱の時には、供物でバラモンたちをもてなすべきである。(69)

棍棒戦の巻の詠唱の時には、あらゆる好ましい性質を持つ、香料や花環や塗香を施すべきである。

偉大なる旅立ちの巻の詠唱の時には、同様にあらゆる好ましい性質を持つものを施すべきである。(70)

天国への昇天の巻の詠唱においても、同様にバラモンたちを供物を与えてもてなすべきである。

ハリヴァンシャの結びの詠唱の時に、一千人のバラモンを供給すべきである。(71)バラモンのそれぞれに、黄金片をつけた牛一頭を贈るべきである。王よ、その半分を貧乏な者

それぞれに施すべきである。(72)

各巻の終結の時に、賢者は詠唱者に黄金片をつけた（バーラタ物語の）写本を贈るべきである。(73)

ハリヴァンシャの巻が詠唱される時、バラモンはそれぞれの読誦が終わるごとに牛乳で煮た米飯を与えられるべきである。(74)

聖典に精通した敬虔な者は、すべてが終了したら、すべての書を麻布で包み、清らかな所に置いて、(75)

自分は白衣をまとい、花環をつけ、立派な飾りをつけて、清らかな心となってから、香料や花環を別々に供えて、正しく拝礼すべきである。(76)

王よ、人は敬虔な心で、よく心を統一して、全書の写本に、食べ物、花環、飲み物など欲望を満たす種々さまざまな、清らかなものを供えるべきである。(77)

(詠唱者に) 黄金や黄金に属するものを謝礼として与えるべきである。いつも三プラ（プラ＝重量単位）の黄金を、敬虔な心で与えるべきである。(78)

その半分、あるいは句の残りの詠唱であっても、それに対して、正しく得られた財富を、望まれるだけのものを、バラモンたちに施すべきである。(79)

自己の心の師である詠唱者を、尊敬の念によって満足させるべきである。その時、ナラヤナーヤナなどのすべての神の御名を唱えるがよい。(80)

それから、最上のバラモンたちの体を香料や花環でよく飾ってあげて、種々の好ましい品々や、さまざまな贈物で、彼らを満足させるべきである。(81)

こうして、人々はアティラートラ祭（夜を通じて行うソーマ祭の一種）の功德を得る。

このように、各巻ごとに、彼は祭式執行の果報を獲得する。(82)

バラタ族の最上者よ、詠唱者は語と句の明瞭な発音を持ち、バラタ族の主よ、学識を具えた者が、バーラタ物語を詠唱すべきである。(83)

多くのバラモンのインドラを供応してから、規定に従って、彼らに贈物をするべきである。バラタ族の最上者よ、詠唱者は供応されてから、豪華な装飾品で飾られる。(84)

詠唱者が満足した時、(家長は) 最高の幸運に満ちた喜びを味わう。バラモンたちが満足した時、すべての神々は歓喜する。(85)

バラタ族の雄牛よ、この後、バラモンは種々の優れたもので、十分にもてなされるべきである。(86)

人中の最上者よ、あなたの求めに応じて、私はこのように規定を説明した。あなたは誠実に実行すべきである。(87)

王よ、バーラタ物語の詠唱を聞く時に、それぞれの読誦において、王中の最上者よ、よりよき幸福を得ようと願う者は、常に勤勉に実行すべきである。(88)

バーラタ物語を常に聞くべきであり、バーラタ物語を称賛すべきである。家にバーラタ物語が

ある者は、「勝利」(ジャヤ)という名称の聖典がその者の手中にあるのだ。(89)

バラタ物語は最高の福德あるものである。バラタ物語にはさまざまな話がある。バラタ物語は神々にさえも尊敬されている。バラタ物語は最高の目標である。(90)

バラタ族の雄牛よ、バラタ物語はすべての聖典のなかの最高のものである。人はバラタ物語によって解脱を得る。これは真実であり、私はそれを述べる。(91)

マハーバラタと呼ばれるこの物語、大地、牛、(言葉の女神)サラスヴァティー、バラモン、ケーシャヴァ、これらの功徳を称讃する者は、決して氣力を失わない。(92)

ヴェーダ聖典に、ラーマヤナに、聖なるバラタ物語において、ハリ神は始・中・終のすべてにおいて、称讃されている、バラタ族の雄牛よ。(93)

最高の目標を得ようと望む者は、神聖なヴィシュヌ神に関する陳述があるもの、および永遠なる聖典(śruti)を聞くべきである。(94)

この物語は浄めの聖句である。これは正義(ダルマ)に関する最高の例証である。これはすべての功徳を具えている。繁栄を願う者はこれを聞くべきである。(95)

身・口・意によって犯した罪はすべて、(バラタ物語を聴聞することによって)消滅される。恰も、闇が日の出によって消滅されるように。(96)

ヴィシュヌ神に帰依する者は十八巻の詠唱を聴聞することによって得られる果報を得る。これに疑いはない。(97)

(これを聞くことによって)男性も女性もヴィシュヌ神の地位に達する。息子を望む婦人はヴィシュヌ神の栄誉をたたえるこの物語を聞くべきである。(98)

先に語られたような果報を得ようと望む者は、その人の力に応じて、詠唱者に謝礼として五ニシュカ(ニシュカ=重量単位)の黄金を与えるべきである。(99)

自分自身の幸福を願う者は、詠唱者に、角を黄金で包み、仔牛を連れ、布で覆った一頭の赤毛の牛を贈るべきである。(100)

バラタ族の雄牛よ、両腕の装飾品や耳飾りを与えるべきである。また、とりわけ財富を贈るべきである。(101)

王よ、詠唱者に土地を施すべきである。土地の施しに等しい贈物は今もなく、将来にもないであろう。(102)

(バラタ物語を)いつも聴聞する者、あるいは他の人々に聞かせる者は、すべての罪が清められ、ヴィシュヌ神の地位に達する。(103)

かかる人は、十一代におよぶ祖先のすべてを救済し、また、自分自身ならびに妻や息子たちを救済する、バラタ族の雄牛よ。(104)

(バラタ物語の詠唱を終了して後、)王よ、ホーム祭を、その十部分を執行されよ。人中の雄牛よ、あなたの前で、私はすべてにわたって説明した。(105)

天国への昇天の巻 終わり